

- カウンセリングってどのような仕事なのでしょう？
- 区政の現場に「科学」はどのように関わってくるのでしょうか？
- バイオテクノロジーの応用可能性: cellFとYCAMの試み ● EPAの子供の環境衛生保護



この『市民研通信』に紹介されている記事論文など、市民研の活動成果は、どなたであっても無償で読んでもらえるように、ホームページですべてを公開しています。市民研では、こうした非営利・完全公開の趣旨に賛同し支えてくださる方々に、ご入会やご寄付をお願いしています。

ご送金・ご入会・ご寄付につきましては以下のやり方をお願いしています。

- 100円単位の送金 100円単位のカンパや少額の送金（郵送費など）にご利用ください。

市民科学研究室の新しいホームページのメインメニューに「ご支援のお願い」があります。そこから「**市民研オンラインショップ**」のサイトにつながります。そのなかに、「一口100円ご送金」のカードがありますので、ご利用ください。

- 会員登録** 年会費を送金して次のいずれかの会員になることができます。

★レイチェル会員………年会費 10,000円 (総会における議決権あり)
★ダーウィン会員………年会費 3,000円

会員になると、

- ・市民科学講座など市民研主催のどのイベントでも参加費（資料代）が半額になります（ただし市民科学講座Aコースもしくは飲食の提供を伴うイベントについては「半額」は適用されません）。
- ・市民科学研究室所蔵の書籍・文献資料や映像資料を借りることができます。
- ・事前にご連絡いただければ、u-stream配信をすることになるイベントについては、それへのアクセス情報をお伝えします。
- ・事前にご連絡いただければ、各研究会のほぼ毎月行われる会合にskypeで参加できます。
- ・レイチェル会員には市民研が今後発行する有償の出版物などがすべて無償で送付されます。

- ご寄付 一口1,000円から受け付けております。

ご送金の方法は以下のいずれかをお願い致します。

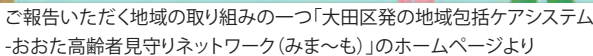
郵便振替……………口座加入者名：市民科学 振替口座番号：00160-4-608503

オンライン決済……………市民研ホームページの「市民研オンラインショップ」から

水戸市、大田区、草加市、川崎市、浦安市……いろいろな地域で、これまでにない形の、行政と市民の協働、住民の自発的な集いや交流が生まれ、介護予防や健康増進の確かな「共助」が築かれつつあります。そうした地域からゲストを数名お招きし、「まちの元気」を生み出すための知恵やノウハウを共有します。よりよい医療・保健・福祉の実現に向けた確かなヒントが得られるのではないかと思います。

- ゲスト
- ・朝日光一郎さん（在宅医療・介護の専門職が地域住民に寄り添う地域デザイン「水戸在宅ケアネットワーク」）
 - ・澤登久雄さん（おおた高齢者見守りネットワーク「みまーも」／東京都大田区地域包括支援センター入新井）
 - ・服部満生子さん（「みんなの保健室 陽だまり」／埼玉県草加市） ほか

- 3月4日(土) 14:00～17:30 [定員20名]
- 本郷三丁目のカフェ 「FARO COFFEE & CATERING」
- 参加費：1500円(コーヒー付き)
- お申し込み：市民科学研究室ホームページの「健康まちづくりフェスタ 参加登録」ページより



2017年4月から1年間、毎月第4日曜日の午前午後を使って、自由が丘から徒歩1分の所にある「**魚菜学園 自由が丘お料理学校**／**よみうりカルチャー自由が丘**」で、子ども料理科学教室(午前)ならびにその大人向けヴァージョン(午後)を実施することになりました。市民科学研究室から数名が講師として毎回、教室に赴くことになります。

市民研の「食の総合科学研究会」のこれまでのスタッフと一緒に、新たにこの仕事をすすめてくださる方を募集いたします。

料理作りと子どもと接することを楽しく思える方なら、年齢や性別や経験は問いません。ただ、上記日曜日を確保でき、事前の研修や研究会へ参加する余裕が持てそうなので、お住いが自由が丘にできるだけ近い方を希望します。アルバイト料は教室1回(3時間ほど)につき5000円です(交通費込み)。

お問い合わせ・ご応募は市民科学研究室までお願いします。

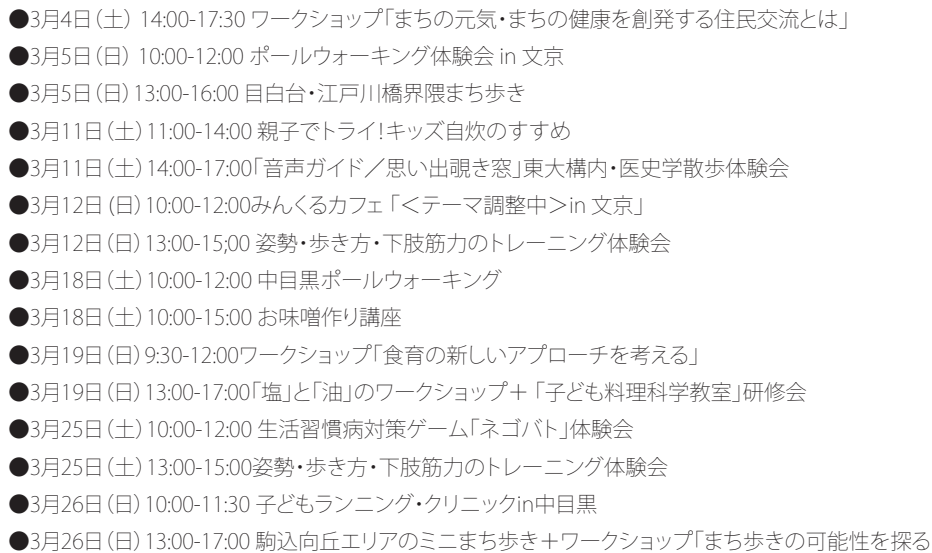


希望者には事前研修を受けていただくこととなります。次のいずれかにご参加ください。

- 2月26日(日)午後1時から
市民科学研究所事務所にて
- 3月19日(日)午後1時から
文京区・アカデミー向丘2F実習室にて

「このまちが好きだ」「地域とつながっている」が、まちの人々を健康にする!

地域の人々のつながりを生かした自発的な健康づくりのさまざまな取り組み(「健康まちづくり」)が全国各地で芽生え、育っています。そのことをふまえ、NPO法人市民科学研究室が、食、運動、まち歩き、そして地域の先進的な取り組みから学ぶワークショップなど、さまざまな体験と交流の機会を提供します。



⇒事前予約が必要です(申し込みは市民研ホームページより)



最相葉月さん、
カウンセリングってどのような仕事なのでしょうか？

講師：最相葉月（ノンフィクションライター）

「心の専門家」「心のケア」なるものに、うさんくささを感じる人は多いのではないだろうか。しかし一方で、「鬱病100万人の時代」との言葉が嘘と言い切れないほどに、心の病を抱えている人は少なくないようにもみえる。症状や生活上の支障の出方はいろいろだが、原因がわからず、本人も（場合によっては周りも）深く悩んでいる。セラピスト（精神科医や臨床心理士）だから"治せる"とも限らない。おそらく鍵は、"治る"とは何か"ということへの洞察もあわせて、本人が自身の心へ向き合うことを一緒にどう支えていけるか—ということにありそうなのだが、ではそうしたことを仕事として引受けるセラピストたちは、自分の律し方を含めて、どう回復への道のりを辿れるようにしているのか。最相さんの『セラピスト』はカウンセリングの歴史をふりかえりつつ、セラピストの仕事の奥深さ、難しさに光をあてたノンフィクションだ。この講座では、「カウンセリングって何？」という問を中心に、科学・社会・人間の、通例の科学技術論ではあまり探りが入れられなかったあたりにも目を配って、最相さんとじっくり語り合ってみたい。【進行役の上田（市民研・代表）より】

⇒講義録は市民研 HP で



短期連載
大川小裁判の判決をどう読むか ～その2～

石巻市立大川小学校では、大津波警報の情報が届いていながら、東北地方太平洋沖地震発生から50分近く校内に留まり、避難がなされませんでした。危機を察知し、裏山への避難を提案した教員や児童、迎えに来た保護者らがいたにもかかわらず、なぜ、避難が遅れたのでしょうか。その原因について、くわしく分析してみます。

危機感がなかったのではなく、危機感があってもそれを生かせない学校運営の問題点が浮かび上がります。これは、自然災害からの防災だけでなく、教員たちの知恵を集めてよりよい協力体制を築き上げようとするのに反するかたちで、学校現場に圧力をもたらしている構造的な問題だとみえてきます。



⇒続きは
市民研 HP で

バイオテクノロジーの応用可能性
cellIFとYCAMの試み

iPS 細胞ときくと、2012年のノーベル生理学・医学賞を共同受賞した京都大学の山中伸弥教授や、再生医療や創薬への応用を真っ先に思い浮かべる方がほとんどかもしれません。その一方で、海外ではロックスターに憧れるアーティストがiPS細胞の技術を使って楽器をつくっていることをご存知でしょうか。2017年1月、オーストラリア南西部のタスマニア島にある美術館「Museum of Old and New Art (MONA)」で、その楽器の演奏があると聞き、タスマニアに飛びました。

羽田空港からシドニー空港まで約9時間半、さらにシドニー空港から約2時間飛び、1月19日の夕方、タスマニアのホバート空港に到着しました。ホバート空港は、横長の平屋建てで、飛行機からはタラップで降り立つ小さな空港です。空港からはタクシーで20 分程で滞在先の市街に入ることができます。日本との時差は2時間と比較的少なく、気候も思っていたほど暑くありませんでしたが、20 時を過ぎても外は明るく日が長いことでようやく遠方のタスマニアに来たという実感がわきました。また、ホバートは港町であり、散策中のカモメの鳴き声が印象的でした。

⇒続きは市民研 HP で



MONAから望むタスマニアの風景

池尻成二さん、
区政の現場に「科学」はどのように関わってくるのでしょうか？

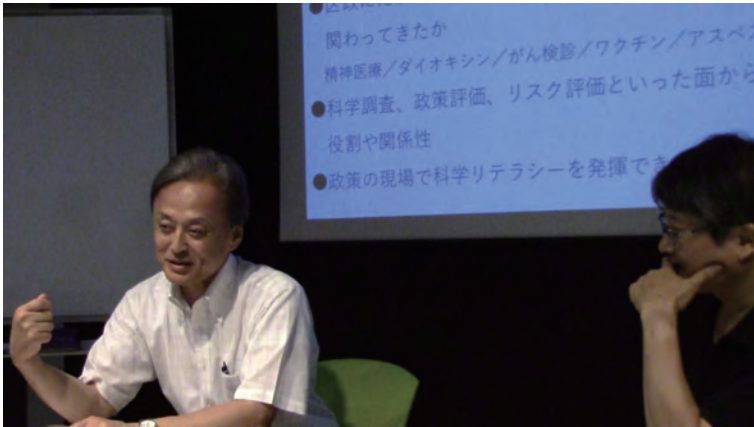
講師：池尻成二（練馬区議会議員）

◆この講座のねらい

例えば東京都においては、環境や保健・医療といった分野で多くの区民が解決を望む様々な問題を、どう区政に反映していけるのか、その場合に国と都と区の関係はどうなっているのか、現場の状況からどうデータととり科学的なリスク評価につなげるのか、意見の相違や対立をどうのりこえて施策を決めていくのか.....「科学」の使われ方・生かされ方を、池尻さんとじっくり論じ合ってみたいと思います。

◆講座に向けて 池尻さんからメッセージ

政治と「科学」は、じつははとても近いところにあります。自然科学の知識や方法抜きには語れない環境問題などにとどまらず、施策の評価・検証のベースになる統計処理の方法などもそうです。行政が説明責任をきびしく問われる時代。だれもが、施策や主張のエビデンスを「科学」的な方法や評価に求める時代。そんな時代だからこそ、「これって変」「恣意的すぎる」といった議論もしばしば見受けられます。アスベストやダイオキシン問題から貧困対策、ニース調査まで、区政の現場で見てきた「科学」のありようを振り返ってみます。



⇒講義録は
市民研 HP で

【翻訳】 **アメリカ合衆国環境保護庁における
子供の環境衛生保護を向上させた20年間** 翻訳：五島廉輔
五島綾子
上田昌文

Environmental Health Perspectives 124巻12号(2016年12月)より

原題 **Two Decades of Enhancing Children’s Environmental Health Protection
at the U.S. Environmental Protection Agency**
著者 Michael Firestone, Martha Berger, Brenda Foos, and Ruth Etzel (米国環境保護庁)

【翻訳者からのメッセージ】

この論文はアメリカ合衆国の官庁のレポートですから、わくわくするような展開はありません。しかしアメリカ合衆国環境保護庁 (U.S.EPS) が自国の子供たちの健康を守ろうと、20年間最善を尽くして活動してきたその経緯と成果が丁寧に書かれており、アメリカ合衆国の公衆衛生・環境問題に対する取り組みの姿勢を直接うかがうことができます。

子供は臓器組織の代謝能力が十分発達していないのですが、よく食べ、飲み、呼吸し、その上、子供特有の習性で動き回ります。そのために環境化学物質に曝露されやすく、喘息、肥満症などばかりでなく、注意欠陥障害、学習障害などにも及ぶ可能性があることを警告しています。おそらく、近年の脳科学の進展と相まった科学研究の賜物でしょう。

なお、トランプ政権はパリ協定を脱退するという報道もありますが、気候変動が子供たちの健康に及ぼす影響を克服するための見事なシステムづくりはアメリカ合衆国の科学者と政策立案者の連携を示していて注目に値します。

医療関係者ばかりでなく、保育士、教師、子育て中の御両親など多くの方々に読んでほしい報告です。

⇒続きは市民研ホームページの「活動と資料」の
なかの「海外文献翻訳」でお読みいただけます。



市民科学講座Bコース<第11回>講義録(2016年6月29日)
**中田哲也さん、私たちの食べものや農業は
この先どうなっていくのでしょうか？**
【質疑応答編】

▶前号に引き続き、中田さんの講義録の後半【質疑応答編】を
市民研HPに掲載しています。